



目 次

「新たな連携の下で」田んぼの生物・文化多様性 2030 キックオフ集会報告 ラムネット J 安藤よしの	1~3
「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」への敬意と期待 金沢大学名誉教授 中村浩二	3~4
編集後記	4



＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「新たな連携の下で」田んぼの生物・文化多様性 2030 キックオフ集会報告 ラムネット J 安藤よしの

12 月 12 日 (日) 14:00~17:00、栃木県小山市中央公民館において、対面とオンライン併用で「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト キックオフ集会」が開催されました。田んぼ 10 年の登録団体に加え、11 日から小山市立文化センターで開催された「第 20 回全国菜の花サミット in 小山」の参加者も交えて、2022 年以降の活動について議論し、それぞれの決意を発表しました。集会参加者は、現地参加 60 名、オンライン参加 30 名でした。



開会の挨拶

呉地正行氏

浅野正富氏

ラムネット J 前水田部会長の呉地正行さんがあいさつの中で、2020 年までを期限に活動してきた「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト」の成果や課題を反映し、2030 年までの活動計画案「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」をスタートさせることに至った経緯を報告しました。

続いて IUCN 日本委員会の道家哲平さんの基調講演では、これまでの生物多様性の劣化傾向を逆転させ、回復の軌道に乗せるために農業部門に何が期待されているかについて、CBD



基調講演 道家哲平氏

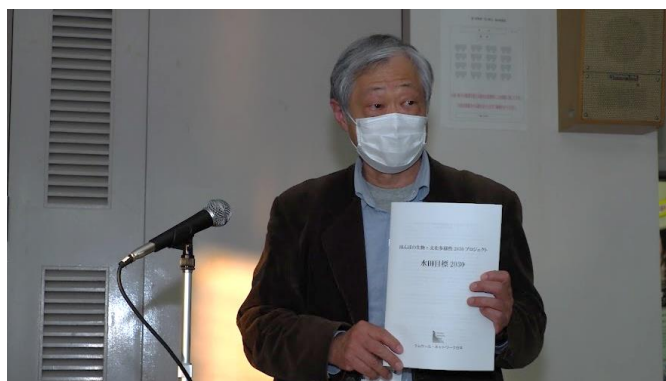
の新しい国際目標案や IPBES (生物多様性と生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム) が 2020 年に発表した「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」等をもとに講演しました。「農業は生産性を高め、世界の食糧の安定供給を果たす努力をしてきたが、一方で農地への土地変更や農薬・化学肥料の過使用などで自然環境を劣化させ生物多様性の安定性を損なってきた。農業は、Nature Positive (自然にプラスの影響を与える) に改変すべきテーマの一つとされており、持続可能な農業への転換が急がれる。」等が語られました。



基調講演 西廣淳氏

続いて国立環境研究所気候変動適応センターの西廣 淳さんの基調講演「気候変動と『田んぼシステム』」では、メタンの発生など、気候変動にマイナスの影響を及ぼすとされている水田が、実は管理の仕方によってはプラスの働きをすることなどが報告されました。田んぼの周辺・水源域の森林整備とセットで進めることによる脱炭素への貢献があり、さらに適応への貢献としては、耕作していない水田でも担いうる機能として、畔・水路・溜池などの「田んぼシステム」が重要で、これは洪水の流出の遅延、遊水地的機能を活用した水害リスク軽減や、多様な水域を活用した生物の避難場所確保等に役立っているとのこと。気候変動と人口減少が進みつつある現在、「自然に根差した社会」への転換が求められている。水害リスクが深刻でコメを主食にする日本では、「田んぼからの社会変革」が考えられる。伝統技術と未来技術を駆使し、多様な田んぼシステム (生産重視型水

田～環境配慮型水田～粗放管理型休耕田）の機能を効果的に活用する工夫が重要と、まとめました。



水田目標 2030 を紹介 金井裕氏

そのあと、ラムネットJ現水田部会長の金井裕さんが「田んぼの生物・文化多様性 2030 が目指すもの」として、現在作成中の 2030 年までの行動計画案について説明しました。会場で配布されたこの行動計画案は、会員・田んぼプロジェクト登録者・関連活動に取り組む人々との連携で実施して達成を目指すもの

で、計画案への意見を募集し、来年の CBD COP15 終了後には案を確定させるためのワークショップを開催する予定であることなどを発表しました。

プログラム第 3 部リレートーク「私はこれをやります！」では、日本各地で田んぼの活動に取り組む農家・市民団体・企業・生協、自治体、さらに特別参加の篠原 孝さん（立憲民主党議員）・菜の花プロジェクト代表の藤井絢子さんなどが、それぞれの今後の活動について発表しました。

リレートーク最後は、壇上に勢ぞろいした豊岡市・佐渡市・大崎市・小山市・いすみ市の ICEBA（生物の多様性を育む農業国際会議）開催自治体の担当者から、地域の生物多様性向上・有機農業と学校給食の有機米使用等について力強い発言が続き、今後の活動への期待が高まりました。

浅野市長が、『自治体だけでは目標達成はできない、ぜひ皆さんとの協働で実現させたいので、積極的な参加をお願いします。』と締めくくり、田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクトがスタートしました。



及川ひろみ氏

館野 廣幸氏

五十畑匠氏

石川均氏

印鑑智哉氏

楠通昭氏



富居 登美子氏

山崎敏彦氏

古郡 敬氏

岸健二氏

伊藤秀雄氏

篠原孝氏



藤井絢子氏

木全 敏夫氏

唐澤篤子氏

コーディネーター船橋玲二氏

コメンター古谷愛子氏

司会 安藤よしの氏



豊岡市

佐渡市

大崎市

小山市

いすみ市

小山市長



ICEBA 開催自治体



集合写真



展示と動画上映

看板



「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」への敬意と期待

石川県立自然史資料館館長、金沢大学名誉教授 中村浩二

【里山の重要性と人材育成事業】

私は、「能登里山マイスター養成プログラム」を 2007 年にスタートし、事業名と内容を調整しながらいまも継続しています。これは能登の厳しい現実（人口減少と高齢化など全国共通）を直視し、再活性化と持続発展を担う若手社会人のための人材養成事業です。これまでに 205 名（能登、県内出身者、I、U ターンの合計）が修了し、多くは能登に定住し活躍中です。同様の人材育成事業をフィリピンのイフガオ棚田（ユネスコ世界文化遺産と FAO 世界農業遺産に認定）でも 2014 年から実施中であり、6 年間で 100 名が修了しました。



里山マイスター

【佐渡と能登の世界農業遺産認定 10 周年】

2011 年 6 月に「トキと共存する佐渡の里山」と「能登の里山里海」が、世界農業遺産（GIAHS）に認定されました（北京 GIAHS 国際会議）。早くも 10 年たち、本秋両地で開催された記念行事に参加しました。佐渡の「GIAHS 認定 10 周年記念フォーラム in 佐渡～トキと共生する佐渡の里山からこれからの日本農業への提言」（10.29～31）のパネルディスカッションでは、渡辺竜五 佐渡市長が「いきものを育む農法」、



トキ

「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」の成果と直面する困難を率直に語り、高橋直樹 大崎市役所課長は「GIAHS 大崎耕土の成果」を、ガン・カモ類の保全を含め報告しました。最終日のエクササイズでは、多数の野生トキ（2008 年に初放飼、いま 500 羽近くまで増加）をあちこちで見ました。国内招へいのみでしたが、佐渡 GIAHS の進捗と直面する現実を学ぶことができ、実に印象深い訪問でした。佐渡では、金銀鉱山の世界文化遺産と国際ジオパークの 2 登録にも力を入れており、実現は近そうです。

能登では「世界農業遺産国際会議 2021」が開催されました（11.25～27、石川県七尾市）。ハイレベルセッションにチュー・ドンユイ FAO 事務局長、谷本正憲石川県知事が参加し、遠藤芳英 GIAHS コーディネーター（FAO 在ローマ）は、会議末に発出される「世界農業遺産に関する能登コミュニケ」を作成する調整会議と分科会 1 に出席されました。3 分科会が開催され、私は、分科会 2「GIAHS の動的保全を担う人材の確保・育成」のまとめコメントを担当しました。ここには大分県国東半島、能登半島、岐阜県長良川、イフガオ棚田（フィリピン、能登里山マイスター養成プログラムと連携）、アッシジのオリーブ園（イタリア）、韓国（5 サイトの概要）の成果が報告さ



イフガオ・バダッド棚田

れました。海外からは、ハイレベル、分科会ともビデオかオンライン参加でした。

【GIAHS サイトの発展のために】

佐渡と能登が先進国として初めて GIAHS に認定された 2011 年当時では、新参の日本を含み世界の認定サイトは 16（10 国）でしたが、現在は 62（22 国）です。先進国からは日本（11 サイト）以外に、イタリア、スペイン、ポルトガル（3 国合計 7 サイト）が 2017～19 に認定されています。前行動計画（2013）では、田んぼ（農業）なのに、世界農業遺産 GIAHS）への言及がなかったのですが、新計画では、GIAHS やユネスコ世界遺産に言及されています。里山コンセプトの重要性は、ラムサールはじめ、いろいろな国連のプラットフォームで強調されています。しかし、それが国連の担当部署、国内では省庁ごとにタテ割りになっており、それが取り組みを分断しています。SDGs が統合プラットフォームとして機能することが期待されます。

GIAHS 認定は、サイト発展のためのスタートであり、モニタリング実施、結果の分析、アクションプラン改訂が義務化されています。佐渡と能登は GIAHS 認定後 10 年を経過し、いま 2 回

目（5 年おき）のチェック・ポイントであり、結果に注目したいです。また、GIAHS サイト間の交流が推奨されており、能登/イフガオの人材養成事業をコアとした交流は、先進事例と評価されています。イフガオ棚田では、生物多様性問題が深刻です（イネ在来品種の減少、外来種による在来種の絶滅など）。私は呉地正行さん、船橋玲二さんにお願ひし、イフガオ棚田の生物多様性の予備調査の実施（2018.11 と 2019.9）と、両地で開催されたワークショップに出席していただき、将来の本格的な調査と交流に備えています。GIAHS サイト間、GIAHS/ラムサール間の交流進展が期待されます。

【参考資料】

（1）中村浩二、北村健二「第 10 章 人材が育つ仕組み—里山マイスターがもたらすもの」、189-203、『地域環境学：トランスディプリナリー・サイエンスへの挑戦』、佐藤 哲・菊地 直樹（編）、2018/1/13、東京大学出版会、430 pp.

（2）中村浩二（2018）世界農業遺産「能登の里山里海」と「フィリピン・イフガオ棚田」の交流と連携活動（Twinning）、2018、121-123、イヴォーン・ユー、永田 明（編）『世界農業遺産への道のり～国連大学と地域の歩み～』、UNU -IAS OUIK、金沢、128 pp.

ダウンロード：https://ouik.unu.edu/wp-content/uploads/Road_to_GIAHS.pdf

（3）中村浩二（2021）持続的発展のための人材育成：世界農業遺産（GIAHS）「フィリピン・イフガオ棚田」と「能登の里山里海」の連携事業。21-29、第 28 回報告書『文化遺産と SDGsⅢ—地域社会における文化遺産の役割を考える』、文化遺産国際協力コンソーシアム研究会、138 pp.

ダウンロード：https://www.jcic-heritage.jp/wp-content/uploads/2021/03/28th_seminar_report.pdf

Youtube: <https://www.youtube.com/watch?v=A90P2jJ3-nk>



イフガオ里山マイスター来日研修の様子

編集後記

安藤よしの

生物多様性条約締約国会議の開催スケジュールが延期になること・・・回。とうとうしびれを切らして、というわけではありませんが、12 月 12 日に「田んぼの生物多様性 10 年プロジェクト」に替る「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」をスタートさせました。CBD の COP15（6 月か？）で正式に決定される新目標を受ける形で、ラムネット J の水田目標もワークショップ開催等を経て、夏には正式に決定する予定です。水田目標案に対するみなさんからの御意見や、プロジェクトへの参加をお待ちします！ とても長い助走期間でした…

なお、キックオフ集会に参加できなかった人向けに、録画配信の準備をしています。



連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX: 03-3834-6566

田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。

このニュースレターは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。

